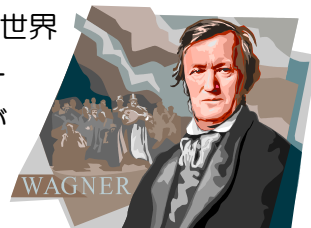


ワーグナーが求めたテノール～ワーグナー&ヴェルディ生誕 200 年企画①

今年はおペラ作曲家の二大巨頭、ワーグナーとヴェルディの生誕から 200 年。世界各地で二人にちなんださまざまな演奏会やイベントが予定され、雑誌やインターネットでもその情報に触れる機会が増えています。そこでしばしば目にするのが「ヘルデンテノール」という言葉。皆さんはご存知ですか？



【テノールとは…？】

ラテン語の「保持する(tenere)」という言葉に由来する。現在は、一般に高音域の男声のことを指す。長きに渡り女声は教会音楽に参加できなかったため、それまでテノールは最も際立ったパートだった。しかし 17 世紀後半のイタリア・オペラにおいてカストラート（去勢した男性歌手で、女声の音域で歌うことができた）が台頭したことにより、その地位を奪われてしまう。これに対してテノール歌手はさらに高音域が楽に演奏できるように、またより強い声（高音域になっても頭声ではなく胸声で歌う等）を求めて進化していった。

【オペラにおけるテノールの役どころ】

オペラでは人物のキャラクターによって声の音域、質感が異なる。テノールには青年から王子、英雄など幅広い役柄が与えられている。高く軽やかな声には若々しいイメージがあるのか、比較的軽い「リリコ」の声質は青年の役が多い。例を挙げると、ドニゼッティ作曲『愛の妙薬』のネモリーノ、ブッチーニ作曲『ラ・ボエーム』のロドルフォなど。一方、複雑な内面を持つ人物は「ドラマティコ」という少し重い声質の歌手が歌うことが多い。ヴェルディ作曲『オテロ』のオテロや、レオンカヴァッロ作曲『道化師』のカニオなどはこのカテゴリーに属す。

【ヘルデンテノール】

ワーグナーは自作のいくつかの役柄にどのようなテノールがふさわしいか、確固たる信念をもっていた。その理想の声が、今日ヘルデンテノールと呼ばれている。ヘルデンとは「英雄的」という意味。それまでのテノールの声を「男らしくなく、軟弱」と思っていたワーグナーは、ラッパのような音色と、並はずれた持続性を具えた力強さで、強い男性を表現できるテノールを求めた。トリスタンをミュンヘンで初演したカロルスフェルトという歌手の声が、ワーグナーの理想であったといわれている。諸説あるが、ヘルデンテノールは次のように分けられる。

★若々しいヘルデンテノール Jugendlicher Heldentenor

【例】エーリク(さまよえるオランダ人)、ヴァルター(ニュルンベルクのマイスタージンガー)等

★重厚なヘルデンテノール Schwerer Heldentenor

【例】ジークムント、ジークフリート(以上ニーベルングの指環)、タンホイザー、トリスタン等

【ヘルデンテノールを聴く】

「ジークフリート」ユング (Ten) ブーレーズ (指揮) バイロイト祝祭歌劇場 [ALD124-126](#)

「タンホイザー」コロ (Ten) メータ (指揮) バイエルン国立歌劇場 [DVD1287](#)

「トリスタンとイゾルデ (演奏会形式)」トレレーヴェン (Ten) アバド (指揮) ルツェルン祝祭管弦楽団 [DVD882](#)

最近受け入れた新刊・新譜から、おすすめの資料をご紹介します♪



【音源資料】

『ザ・フルート・キング～フリードリヒ大王の無憂宮の音楽』パユ (Fl)

ピノック (Cemb)、カンマーアカデミー・ポツダム ほか 請求記号：4G6.52-53

プロイセンのフリードリヒ大王と、彼を取り巻く作曲家たちの作品でまとめられた2枚組CD。1枚目には大王や彼の音楽教師であったクヴァンツ、ベンダ、C.P.E.バッハによるフルート協奏曲、2枚目には大王に与えられたテーマから作曲されたといわれる J.S.バッハの「音楽の捧げもの」やフルートとチェンバロによるフルートソナタ等が収められている。ベルリン・フィルの首席奏者のほか、室内楽アンサンブルのシ・ヴァン・フランセ等、多方面で活躍中のフルート奏者エマニュエル・パユの伸びやかな演奏が堪能できる。

『ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第2・3番』 ベレゾフスキー (Pf)、リス (指揮)

ウラル・フィルハーモニー管弦楽団 請求記号：4E2.29

ボリス・ベレゾフスキーといえば「ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン」の常連ピアニスト。毎回協奏曲から室内楽、ソロに至るまで、さまざまな演奏で聴衆を魅了している。彼の持ち味はその超絶技巧はもちろん、どっしりとした身体の中から湧き上がるような大きな音楽ではないだろうか。包み込まれるような広大なスケールの音楽は、今回ラフマニノフの楽曲と相俟って素晴らしい。共演は、やはり音楽祭でおなじみの指揮者ドミトリー・リスとウラル・フィルハーモニー管弦楽団。

【映像資料】

『シンデレラ』熊川哲也 (演出・振付)、K-BALLET COMPANY 請求記号：DVD1764

熊川哲也が率いるバレエ団による、2012年に初演された作品。英国ロイヤルバレエ団に在籍していた熊川の演出・振付は、同団のレパートリーであるフレデリク・アシュトン版に多く影響を受けたように思われる。それをベースにしながら、明確な物語の進行、コミカルな演出など熊川ならではのアイデアも満載。特にシンデレラが舞踏会に到着するまでの情景は、これまでの演出ではなかなか見られなかったものだ。また、プロコフィエフの美しい音楽をまとめている指揮者の井田勝大には、バレエ指揮者としてこれから有望な若手。踊りも音楽も楽しんで。

【図書】

『教養としてのバッハ―生涯・時代・音楽を学ぶ14講』礒山雅、久保田慶一、佐藤真一編著

アルテスパブリッシング 請求記号：6.9-B122I-12

国立音楽大学にて2011年度後期に開講された講義「バッハとその時代」の内容を集約した図書。バッハの数字である「14」(詳細は本書にあり)の章にわかれて、彼を取り巻く環境、時代、宗教、言語、文化などさまざまなものに対して言及している。大変興味深く、実際の講義を受講できた学生を羨ましく思う内容。バッハは西洋音楽を語る上で避けられない人物であるが、このように彼の音楽を支えるバックグラウンドをまとめた書にはなかなか出会えない。